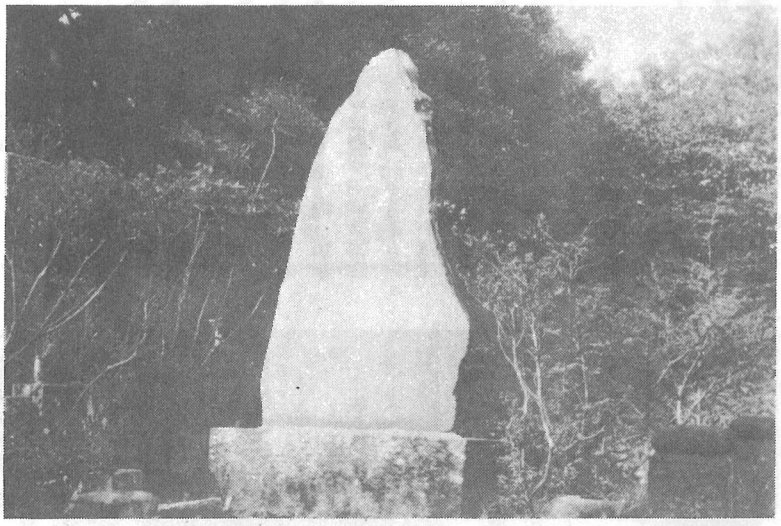
横芝の碑　その五十

泰西医学の草分け、広瀬史雄の碑

屋形南の西照寺（住職小山俊海師）の境内には、太平洋戦争の折横芝上空の空中戦で散華した彼我の英魂を祭る英風永存の碑や、海保漁村緑りの墓石等が建っていることは御存知の通りですが、ここに、横芝町泰西医学の草分けともいえる人の碑が建っていることは余り知られていないようです。

それは、梅厓広瀬史雄という人に対する報恩を兼ねた寿碑です。

広瀬史雄は、文化年間（一八〇四～一八一六）に仙台藩士富塚尚行の四男として生れましたが、幼い頃から武術より学問を好み、特に西洋の知識を収得できるということから泰西医学に力を注ぎ、三十才になった頃は、仙台藩中教わるに師なく、論ずるに人無し、という程になっていました。しかし武士の家に生れた者が、医師或いは学問によって身を立てる、ということは中中難かしく、親類始め藩中の人々の反対も烈しかったのですが、向学の志止み難く、遂に今まで藩士の子として名乗っていた富塚の姓を捨てる、ということで故郷を離れ、遊学、というよりは学求の徒として江戸を目指して旅立ったのですが、仙台城下を去る時、城下を流れる広瀬川の畔に立って「再び仙台には戻れないだろう、せめての名残りに今後はこの川の名をとって広瀬と名乗ろう」と心にきめました。



境内の一番奥に建っている広瀬史雄の寿碑

故郷を離れた史雄は旅の先々で耳にする学者という学者、名医といわれる医師等の殆んどを訪れ、その教えを受け、または論談を交えながら、やがて上総国屋形村に足を踏み入れていました。折から天保の改革、外国船渡来等のこともあって江戸の町は次第に騒がしくなり、落付いて学問をするには適当なところではなくなっていましたので、暫らくの間江戸に入るのを見合せようと、久しぶりに逗留の家を求めて草鞋を脱ぎました。その中に、儒学者海保漁村や理学者伊能忠敬の出身地がこの近くであることと、土地の人々の素朴な気質に心をひかれている中に、或人の世話で近くの娘さんを妻に迎え、天保十二年、此の地に住居を定め、医師を開業し、その傍求められるままに塾を開いて若者達に学問を教え始めました。既に仙台藩時代から習得していた泰西方式の医術に加え、修業の旅で学んだ治療方法と、貧富を分たない、療養費度外視しての扱いは忽ちにして近傍に広まり、治療を乞う者は名目通り門前市をなすの有様でした。

また、史雄の学識と人格を慕ってその門を叩く者は数里（一里は約四粁）の先からも訪れ、一時は二百余名に達し、入門の申込みを断るのに困った程でした。

史雄は子供に恵まれず、妻の生家も子供が少なかったので、門弟の中で頭角を表し、門下の逸機といわれた南川岸の伊藤春汀を嗣子に迎えて医業と学塾の運営を譲り自分は梅厓と号し、貧しい人々の施療や、自分の学問に励しみながら平和な生涯を此の地で閉ぢたのです。

梅厓が六十余才を迎えた明治六年の十二月、門弟達は相談して、梅厓の長寿を祝い、併せてその報恩を表す意を刻んで一基の碑を建て後世への標としたのです。

写真はその碑で、境内の一番奥に建っていて編額には、史雄広瀬君之寿碑、そして碑文には、南総武射郡屋形村有医書顕、曰史雄広瀬君、今茲年六十有余其弟子謀為建寿碑以伝其名於不朽微文於余君名素行字愚郷号梅厓史雄其別号故仙台藩士富塚尚行第四子也君幼多寸及長好医乃志遊四方以講求其術既得泰西医術其業大進於是遂卜居於屋形時天保十二年也遠近来乞治者回満其門療痼起癒不治其数性又善乃旁旁童雅以教弟子二百余其嘗有勤帰郷者曰弟子既多不忍志也遂留而不帰

嗚呼医固仁術也而其於弟子又如此宜是其為仁人可、知已而今弟子之所以有此挙者其亦目是也歟君先後娶佐藤氏、小川氏皆無子乃養伊藤氏之子春汀以為嗣春汀余之知人也

明治癸酉十二月　佐倉続豊徳述

石南止狠書

と刻まれています。碑の前方には広瀬家累代を祀る墓石が建っています。（本稿取材に当り、西照寺の小山俊海師、並びに春汀出生の家である南川岸の伊藤勝夫氏の御指導と協力をいただいたことを申添えます。）尚、西照寺は既に御存知の場所と思いますので案内図は省略させていただきました。

（町文化財審議会委員小沢春光氏寄稿）